# イラクに派遣された自衛隊員の被曝検査の実施を求める意見書

米英軍は放射性廃棄物である劣化ウラン（ＤＵ）を兵器に転用、イラクに撃ち込み、多くの人々を殺傷した。その上、戦場に残った毒物であるウラニウムが原因と見られるがんや白血病が、子どもたちを含めて多くの人々を死に追いやっている。

ウラニウムは放射性物質であり、放置されればそれが呼吸などを通じて体内に入り、放射線や重金属毒性の影響で病に倒れることになる。ＤＵによる低線量被曝は、アルファ線が遺伝子を傷つける作用が高いという性質上このような兵器を戦争に使うことを禁止しているが（ジュネーブ条約等）、現実にイラクの人々は、今大きな脅威にさらされている。特に子どもを襲うがんや白血病の被害は、家族も含めて大きな悲劇を生んでおり、国境を超えた医療支援が求められている。

昨年11月、市民運動団体の招きで来日したイラク帰還・元米兵ジェラルド・マシュー夫妻は、広島、長崎で、被爆者を初め現地の人々と交流し、原爆資料館を訪れみずからの病像と似ている実感を持った。東京では、みずからのイラク、サマワでの従軍、体調異変、検査結果（通常の４～８倍のＤＵが体内にある）を報告し、ヒロシマ・ナガサキの人々と同じ症状になっていると感じ、アメリカ人の一人として原爆を落としてしまったことを申しわけなく思うと語り、自衛隊員の被曝検査と家族への支援を呼びかけ、帰国した。

ペンタゴン関係者も、サマワはＤＵで汚染されていると証言をしていることも明らかになった。

よって、本市議会は、政府に対し、イラクに派遣され、帰国した自衛隊員及びこれから帰国する自衛隊員に対してＤＵの被曝検査・特殊健康診断を実施し、使用者の保護安全義務を全うすることを求めるものである。

上記、地方自治法第99条の規定により、意見書を提出する。

平成18年３月29日

三鷹市議会議長　金　井　富　雄